

ストライク・ザ・ブラッド 災厄を操る者

本条真司

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異能を持つ魔族特区に降り立つた「第零機関」

彼らは獅子王機関をも取り締まる権限を持つ、唯一の組織として認め可が降りていた

そんな中、彼らを疎む獅子王機関は、雪菜に監視命令を追加した

目  
次

第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話	第9話	第10話	第11話	第12話	第13話	第14話	第15話	第16話	第17話	第18話	第19話	第20話	第21話	第22話
1	4	7	9	13	16	18	21	24	27	30	33	36	40	43	46	49	53	56	60	63	66

# 第1話

冬風夜斗ふゆかぜよるとは、移動空中環境要塞《スピリダス》から眼下の街を見下ろした

魔族特区『絃神島』

そこは、魔族が闊歩する土地であり、日本国で魔族の存在が許されている唯一の場所と言つても過言ではない

「……」

「主、どした？」

そんな夜斗に話しかけたのは、夜斗の配下にある組織の一員、靈櫻れいおう

家の次男

名を草薙くさなぎ

彼の能力は《災厄者》ディザスターという災厄を操るもの

「いや、別に。特段何があるわけじゃない。とりあえず草薙、俺たちはこの世界に出張つてことになつてる。暴れるなよ？」

「黒鉄じやあるめーし、程々に暮らすさ。そんな暴れなきやならんほど荒れてないだろ？」

「こには第四真祖が暮らしているという噂がある。世界最強の吸血鬼、だな。伝承によれば、本来存在しないはずの4番目…ということらしいから、警戒するに越したことはない」

「うへえ…。めっちゃやだるいやん」

草薙は計器類を操作しながら笑う

これは、楽しみにしているのだろうと夜斗はため息をついた

「…まあ、暴れたら報告書だからよろしく。【図書館】は名前を変えて、

【第零機関】としてここに来ることを忘れるな」

「あいよ。つーか主はその間何するんだ?」

「絃神島の近くにスピリダス浮かべて、第零機関としての仕事をする。

邪魔はするなよ？ したら殺しに行く」

「物騒すぎやしませんかね…」

草薙はそう言いながら後部ハッチに向かつて歩いて歩いていった途中、神機保管庫に立ち寄り、自身の神機を手に取る

「たまには暴れたかつたんだけどなあ。程々にやるか程々に。な、天津禍津」

双剣が同意を返すように、淡い青に光つた

同時刻、絃神島暁家

「ということで、エリジアム行かないか？」

第四真祖、暁古城の友人である矢瀬基樹は、エアコンの壊れた暁家でそんなことを言った

古城は嫌がつたものの、それを無視して妹の凧沙が快諾し、行くことが決まった一行

監視役の雪菜と凧沙・古城のもう一人の友人浅葱は、水着を買いに来ていた

「…で、なーんで俺まで監視しなきゃいけないんですかねえ…」

草薙は愚痴つぽく呟き、ため息をついた

夜斗の異能《アドミニストレータ》により、島中の監視カメラを閲覧できるはずなのだが、草薙は暁古城の監視を行うことになつたのだ

それが絃神島に入る大義名分になるということらしいが…

「目立たずに監視とかまず無理だろ…。まあいいや、【災厄者位階】<sup>ディザスタークラス</sup>《災厄者》、電装支配」

自身の支配下に入れた監視カメラの映像を右眼でモニタリングしながら、アイス屋で買った三段アイスを齧る草薙  
そんな草薙に気づいていたのは、雪菜だけだった

## 第2話

草薙に与えられた任務は大きく分けて三つ

一つ、第四真祖、暁古城の監視

第二零機関に害を成すと判断したらその場で抹殺する任務

二つ、獅子王機関姫柊雪菜の監視

一つ目と同じく、害を成すと判断したら報告と同時に姫柊を殺し、獅子王機関を壊滅させること

三つ目は、楽しむこと

三つ目に關しては何一つ指示を出されていないため、草薙は本当に自由気ままに楽しむつもりでいる

「つつても、一人同時に監視は無理ゲーだろ…。ノイズシリーズくらい貸してくれてもいいと思うんだけどな…」

草薙は3つ目のトリプルアイスを口にしながら呟いた

ノイズシリーズは、夜斗が作った人工生命体だ

とはいってもノイズシリーズの体に入つてるのは大部分が機械である

「貴方は、何者ですか」

「…！獅子王機関、よく俺に気がついたな」

「…つー何故それを…！」

油断していた草薙の目の前に、雪菜が立つていた

草薙は焦るでもなく、淡々とアイスを食べ進めていく

「ふう。まあ安心しな、俺の仕事は第四真祖の監視だから。一応名刺でも渡しておこうか？」

草薙は胸ポケットから名刺入れを取り出し、先程渡されたばかりの

名刺を手渡す

書いてあるのは第零機関のことと、立場が第一部隊隊長であること

それだけだ

「第零機関…？初めて聞く組織ですね…」

「そーだろうな。まあ特に危害を与える気はないよ、俺とか第零機関に損害がなきやあな」

「あの先輩だとなんとと言えませんね…。何せ島一つ沈めかけてますから…」

「マジでやめろよ？スピリダス沈めたらマジで絃神島沈めるから」「なつ…！」

草薙は飄々と言つてのけたが、雪菜にとつてはデリケートゾーンだつたようだ

と同時に、草薙にそれほどの力があると認識したのだろう。式神をバレないように飛ばした

草薙でなければ、それを認識することは困難だつたことだろう

「さつさと戻つてやれよ、獅子王機関。待つてんだろ？第四真祖の妹と、友人がよ」

草薙はそう言いながら異能を起動した

仄かに霧が現れ、草薙を覆い隠し、濃度が高くなつたかと思つたところで、何事もなかつたかのように書き消えた

草薙の姿と共に

「…第零機関…靈桜草薙…」

雪菜はそう呟いて、凪沙や浅葱のもとへと戻つていった

その日の夜

「俺だ、主」

『草薙か。どうだ？初日は』

「特に不具合もなく、つて感じだなあ。あと住むところがないくらい  
か」

『暁古城の家の隣だ。鍵はポストに入れてある』

「先言つてくんない？俺このまま野宿かと思つたんだけど」

草薙は転移魔法で暁古城の自宅の隣の部屋に移動した  
そして雪菜と出会つたことを報告し、継続の指示を受けて電話を終  
わらせた

「荷物…スピリダスに忘れたなあ」

ため息をつきながら、草薙は兄である黒鉄に持つてきてもうよう  
頼んだ

### 第3話

翌日。草薙は夜斗に渡されたチケットでブルーエリジアムのプレオーブンに来ていた

ちょうどよく暁古城と姫柊雪菜がいるのが見える

(囮つたなあのバカ主め…)

「貴方も、プレオーブン招待されたんですね」

「んあ？ああ、姫柊雪菜か。総司令がプレオーブンチケット持つててな、第四真祖の監視にちょうどいいと思つてきてみた」

プールサイドに座る草薙にはなしかけてきた雪菜が隣に座る  
昨日持つていたギターケースは流石に持つていないようだ

「お前音楽とかやるんだな。獅子王機関で学んだのか？」

「カムフラージュです。あの中には対魔族の武装が入っています」

「そんなん言つていいのかよ？」

「戦力として利用せよ、という指示です」

「…獅子王機関め。散々スピリダスにちよつかいかけてきたくせに

⋮  
「壊せなかつたから力を認めたんだと思いますよ、草薙さん」

頭を抱えながら、対岸の屋台で動き回る古城を見た  
監視カメラは周囲にないため、ただの魔術で視力を強化してみている

雪菜も同じように見ているようだが、どうにも別の目を持つている  
らしい

「…魔導犯罪が起きた場合、共闘していただけるということでいいですかね」

「いいですよねってなんだ。そこは主の指示待ちになるに決まつてん

だろ、お前らと違つて本来の目的はこの島が俺たちに適するかを調べることなんだから」「…何をする気ですか」

「早い話が、俺たちは迫害されてたんだよ。だから、迫害されない土地を探して旅してるんだ」

草薙は魔術を切つてそう言い、どこかへ歩き出した古城を追うために立ち上がる

「お前はここで移動したら不自然だろ。俺が行くから、あとで報告してやるよ」

草薙はあるき出し、ライフセーバー詰め所に立ち寄る古城を眺めたここまで近距離なのに気が付かないのは古城の鈍感さを物語っている…と草薙は思つている

「…あ、なんか巻き込まれてる…」

古城が幼女に絡まれてるのを見て、本人とお近付きになつておいても損はないと判断した草薙は、古城に話しかけた

「どーも、暁古城君」

「お、おう…?どこかであつたことあつたつけ?」

「厳密に言えば来週の月曜日に学校であう予定だな。転校生だし。とりあえずその子、保護するならうちで預かろうか?忙しいだろ?」「そうしてくれると助かる…。結瞳、この人に頼んでくれないか…?」「…わかりました。よろしくお願ひします」

「ううういー。ああそだ名乗つてなかつた、俺は靈桜草薙。よろしくな、第四真祖」

草薙はそう言い残して、結瞳を連れて歩き出した

## 第4話

あくまで成り行きで幼女もとい江口結瞳を助けることになつた草薙は、夜斗がとつたホテルの一室に結瞳を連れ込んでいた

(はたからみたら犯罪ですねこれ。まあ別にいざとなりや逃げれるけど、さつき主にもらつた情報によると魔族狩りとかいう魔女がいるんだよなあ。空隙の魔女、だつけ。空間制御：いわゆる瞬間移動を使う：『災厄者』で再現できそうだな、災厄の魔女だし)

などと失礼なことを考えながら草薙は結瞳に五百円玉を投げた

「一階に自販機がある。俺のと君のジュースを買つてきてくれ」「わかりました。何がいいですか？」

「甘い物で」

「意外と甘党なんですね。行つてきます」

草薙は『災厄者』。災厄のことならほぼ全てわかる  
今、海底より近づいてくる災厄のことも

「この気配…レビューアタンか…？いやそんなわけないか、こんな僻地にいるわけがない」

草薙は夜斗に電話をかけようとした。しかし

「圈外…。こんなところが圈外なんてありえないな…」

ため息をつきながら結瞳が開けていった窓を見る  
人は通れない。そう思つていたが…

「…やはり魔族だつたか」

「あれえ？ 気づかれていたんですねえ」

「起動申請。《災厄者》靈桜草薙」

『起動申請受託。システムオールグリーン・コンソール、無意識領域に接続開始…成功。神機【天津】起動しました』

草薙が声を発したと同時に、枕元にあつた二本の剣のうち片方が草薙の元に飛んできた

そして草薙は、切つ先を結瞳に向ける

「災厄を操る俺が、君のような災厄に気づかない道理はない。尻尾あるし、魔力質的には夢魔…といったところか？ まあ何にせよ、俺に喧嘩を売ったんだから死ぬ覚悟はあるだろうな？」

草薙は魔力を圧縮したものを放出。並の魔族や人間であれば、これをプレッシャーと勘違いすることだろう

それほどに濃密で高圧なのだ

「…主はこれがわかつっていたのかもしれないな。まあそんなことはどうでもいい。君は解離性同一性障害といったところか？」

「え？ つらい体験をした結瞳が、自分のココロを守るために生み出した人格つてことですか？ まあ、当たらずといえども遠からずですかねえ」

「イライラする喋り方だな…。で？ その夢魔の能力でレビアタンを起こしてこの島に差し向けてるつーわけか？」

「…そこまで…。貴方は…一体…？」

「第零機関第一部隊隊長、靈桜草薙。ギフトネーム恩恵名称は《災厄者》。レビアタンさえ、俺の支配下に置くことができる」

草薙はそう言うと同時に、狭い室内で後ろに飛んだ

背後には壁。これ以上後退することはできない

剣…というより槍を振り下ろしたのは、見たことのない黒髪の女だ

「…太史局か。どうやら、この国は俺たちをどうあつても敵にしたいらしい」

草薙は静かにキレつつ、女を睨めつけた  
女は何も言わず、槍を構えているのみだ

「…仕方がない。ここで二人とも殺すことにしよう」

草薙はもう片方の剣を取り、十字になるように構えた  
片方の切つ先は空を、もう片方の切つ先は女に向けられている

「厄災よ爆ぜろ。我が恩恵を以て、汝が敵を打ち滅ぼせ」

草薙を覆い隠す濃密な赤い霧が、剣に収束され、形状をかえる  
二本が合わさり一つになり、機構的な造形が見られるものに変化し  
た

「アマツマガツチ」

草薙が呼んだその剣が、青白い風を纏つていて  
アマツマガツチ。2つに分かれたときに名前が変わり、天津と禍津  
になる

「…お姉さん…」

「大丈夫よ、勝つから」

「なんで俺が悪役みたいな言い方するんですかねえ…」

横一文字に薙ぎ払うと、アマツマガツチが風を起こして結瞳と女を

外に追い出す

それを追いかけて草薙が窓から飛び降りた

「…もう一個の能力も使つとか、試験的に。

平和の創始者！」

## 第5話

平和の創始者<sup>ピースメイカー</sup>は、草薙も使つたことがないものだ

原則的に、草薙や夜斗、黒鉄のような第零機関の能力者は2つの能力を保有する

草薙の場合、災厄を起こし操作する能力と、抑え込む能力

今までに戦争だったため、抑え込む能力は使つたことがなかつたのだ

「さて、と。一応名を聞いといてやるよ、報告書に書かなきやいけないし」

「妃崎霧刃、よ」

「莉琉でーす」

「名乗つちやうんだ…。靈桜草薙だ、まあ寝るまで覚えとけ」

草薙は『災厄者』を使い、一瞬だけ古城の力を具現化させる

第四真祖の力は災厄扱い。本人が聞いたら文句の一つでもいいそうではあるが

「よし。『災厄者』、災厄顯現<sup>アクティベーション</sup>。疾く在れ、獅子の黄金<sup>レグルス・アウルム</sup>」

草薙の背後に現れた獅子の黄金が苦悶にも似た咆哮で莉琉と霧刃を威嚇する

「まさか…むりやり従わせているの…!? 第四真祖の眷獸を…!?

「無理やりなら私にもできますけどお?」

「それは無理だな。君にできるのは精々、古城を操つて眷獸を使わせるくらいだろうに。俺は直接眷獸を強制支配して使役してるんだから」

獅子の黄金の咆哮で、雷撃が霧刃に襲いかかる

避けながらも、あまりに想定外といった表情をしている

第零機関 자체、知られているわけではないのだ。まあ、今日初めて名乗っているのだから仕方がないともいえる

「これで少しほは信憑性が増したかな。君たちを止められるのはただ一人、俺だ」

草薙はニヤリと笑いながら、霧に飲まれて消えた

第零機関本部兼飛行要塞スピリダスでは

「ええ、そういうことです。……はい？また俺たちを敵に回すなら、どうなるかわかりますよね？…………まあ、及第点ですね。いいでしょう」

「どうした、主」

通話を終えた夜斗に声をかけたのは、自身の能力で訓練を行つていた黒鉄だ

黒鉄は現状、大まかな作業をすることしかできいため、細かな制御を習得するために日夜訓練しているのだつた

「日本政府から声明が降りた。俺たちを国家公務機関第零として登録し、以降第零機関として名乗ることを許可する…つてな。一応仕事として、魔導犯罪への対応と魔獣対策をやらされることになつたけど」「まあ、及第点つてここだな。つか、海底にいるアレは魔獣対策に該当すんのか？」

「やりたくねえなあと思つて無視してた。けどそもそもいかんよな。  
……第四真祖に暴れられても困るし、俺らでやるかあ」

夜斗は訓練室の奥に向けて声をかけた

何気ない日常会話：買い物を頼むかのように、ごく自然に

「夜架よるか、頼めるか？」

「ええ、構いませんわ。わたくしの能力を試すいい機会ですもの」

クスクスと笑いながら、ゴシックドレスの女が応えた

## 第6話

草薙はふと、レビューアタンのことが気にかかつた  
『災厄者』で操り、海底に返すことはできる。しかしそのためには、一定の距離まで近づかなければならぬ

それに適した異能持ちが、第零機関にいるのだが：

「クスクス。お久しぶりですわね、靈桜草薙」

「ああ、ちょうどよかつた。呼ぼうと思つてたんだよ、夜架」

「あら、わたくしになにか御用が？」

「ああ。お前の恩恵でレビューアタンが浮上した瞬間に真横に飛ばしてほしくてな」

「そのつもりですわ。主様直々に、あの厄災へ対応するように命じられておりますの。殺すだけなら簡単ですけれど、あの子に罪はありませんわ」

夜架は妖艶な笑みを浮かべながら言う

「こういうところが草薙が彼女を好きになれない要素の一つだつた？」

「…そういうところが草薙が彼女を好きになれない要素の一つだつた？」

「…わたくしの恩恵は、『正体不明』ですわ。データベースに載つている限りでは、唯一四文字かつ人を示さない名前ですわね」

「…たしかに、俺の恩恵にしろ主のにしろ、恩恵は三文字で人を示してゐるな」

「気にしていても仕方ありませんわ。とりあえず、あと一時間で浮上してきますし、装備を整えてはいかがですの？」

「その必要はない。どうせ、戦うわけじゃないしね」

草薙はレビュー・アタンを憐れみ、戦わずに元いた場所に返そうとしているのだ

キヤツチアンドリリース。…それにはサイズが桁違いではあるが

「わかりましたわ。では、帰りの手段を考慮してわたくしも一緒に飛びますわよ？津波なんか起こされても困りますし」

「起こさねえよ…。まあそうしてくれると助かる」

草薙はため息をつきながら、キーストーンゲートの屋上からレビアタンがいる方角を見た  
夜架もつられてその方角を眺める

「怒つてる…だろうな」

「ええ。カインの巫女…藍羽浅葱を殺すためとはいえ、レビアタンを悪用しようとしているわけですもの。利用されて怒らない存在はありませんわ。まあわたくしを利用しようとしたらけします」

「怖いこと言うなよ…。お前の能力ただでさえおつそろしいのに」

草薙は夜架に視線を移し、反応を伺った

夜架はクスリと笑つて、髪を耳にかけながら草薙を見る

そんな仕草にドキッとしたことを隠すように、草薙はまたレビアタンの方角を眺めた

「恩恵だけなら、貴方のほうが末恐ろしいと思いますわ、草薙さん？」  
「それは否めんな。俺が起こした災厄は、わりと制御できなくなるし。  
異能込でようやつと一つの能力、つて感じだ」

「そう考えると、わたくしの恩恵は児戯にも等しいかと」

そう言つて夜架は空を見上げた

## 第7話

(クスキエリゼ、だつたか。奴らがレビューアタンを支配しても、取り返すことはできる。けど…その分レビューアタンの負担がえげつないことになるな)

「あら、どうかされましたの？」

「ん…。いや、なんでもない。そろそろ行くか」

草薙は立ち上がり、浮上してきたレビューアタンを見た

おそらく魔獣の動物園のような場所では、古城たちが奮闘しているのだろうと思いつつも、草薙は自分のやり方でレビューアタンを海に返すつもりだ

「承りましたわ。《正体不明》、空間跳躍」

夜架が言い終わるとほぼ同時に、草薙と夜架はレビューアタンの上にいた

空間跳躍は時間をゼロにする魔術を基に、夜架が改良したもの時間だけでなく、体力や魔力さえ消費しない

「さて、と。じやあお話を行きましょうか」

「わたくしは少し離れていますわ。第四真祖を遠ざけるのも、お任せくださいませ」

「つーかよく気づいたよな、古城。いや、獅子王機関の小娘が気づいたんかね？まあ、あんだけ魔力放出してりやあな…」

草薙はレビューアタンの背を歩いて移動し、進行方向に立つようにして水面に降り立つた

そして瘴気を身に纏い、周辺のすべての生物を怯えさせる

レビューアタンといえども、多少は意識せざるを得ないだろう

「よう、レビュイアタン。俺は靈桜草薙つていうんだよろしくな」

返つてくる声は無い

「お怒りはごもつともなんだが、ちと身を引いちやくれないかね？あの夢魔のガキは俺の方で叱つとくからさ」

レビュイアタンが首を傾げるようになに動いた  
それだけで大波が起きるのだから、あまり動かないでほしいという  
のが草薙の心情だ

「お前を無理に起こして島に仕向けた奴がいるんだよ。けどさすがに島を消されると、俺とか住人が困るもんでね。なんだつたらガキをここに連れてきてもいい」

『それには及ばんよ、人間。初めから沈める気などない』  
「直接脳内に…。魔力を振動させてるのか。であれば、何故島に向かうんだ？」

『その夢魔のガキに、ビンタでもしておこうかと』

「そんなことしたら完全に沈むわ！体の大きさの比率見てみろ！」

レビュイアタンの全長は数キロにもなる。そんな巨大な体の手（それがあるかは別として）で叩かれようものなら、第四真祖の眷獸よりわかりやすく沈んでしまうのは明白だ

『であれば、どう落とし前をつけよう？』

「あー…んー…。どうしても自分でやりたいなら、うちの主呼んで対応してもらうけど…？」

『お願いしたい』

「りょーかい」

草薙は電話をかけた。主たる夜斗に

すぐに応答した夜斗は、スピリダスをスクランブル発進させることを決めた

(…ま、主がどうするかはわかんないけど)

草薙はかなり遠くで揉めている暁古城、姫柊雪菜と夜架を遠目に眺めた

## 第8話

夜架は笑った

自分に眷獸を使掛けない古城を見て、その程度の覚悟かと  
そして向かつてくる雪菜の斬撃を片手で跳ね除ける

「対刃防壁、ですわ。切断属性武器の攻撃を完全に無力化するもので  
すわね。その槍はたしか、七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアでしたね。獅子王機関の  
対魔族兵器の一つですわ」

「……何故雪霞狼のこと…？」

「ふふつ、いいですわね、その焦る顔。たまりませんわ。わたくしを含  
め、第零機関の者たちは既に、この世界をラーニングしてあります。  
なので、あなた方が知らないことも、知つてることも全て知つてます  
わ」

「ラーニング…。そういうえば、さつき結瞳のことを頼んだアイツも、去  
り際にそんなことを言つてたな…」

草薙は古城から離れる際、一言だけつげたのだ

「お前のことはラーニング済みだ」と

「ほら、早く眷獸を使わないと…その剣巫ちゃんが死にますわよ？」

クスクスと笑いながら、夜架は片手を上に上げた  
そこに周辺の酸素と水素を合成して得たエネルギーが集まり、圧縮  
されていく

超高压の電気が、夜架の頭上に生まれた

「俺は…普通の人に眷獸を使うわけには…！」

「ここまで見て普通とするあたり、あなたは異常ですわ。わたくしは  
一切加減はいたしません。ああ、それとその槍で防ぐことはできませ  
んわよ？」

「…っ！」

雪菜は考えを見透かされたことに驚き、また防げないことに驚いた  
「これは燃料電池の要領で取り出した電気を、魔術で集めたもの。た  
しかに魔術の核を破壊すればわたくしが操ることはできなくなりま  
すわ。けど、制御を失った電気が暴走したらどうなるか：おわかりだ  
と思いますわ。とくに、第四真祖の眷獸を知ってるあなたなら」

夜架は手を前に向けた  
すなわち、雪菜と古城にだ

「無方向性電磁砲」  
ノンディレクショナルレーザー

夜架の頭上の電気の球から発されたレーザーが、雷にも似た勢いで  
古城を襲う

「ついでですわ。水遁・水龍の舞」

海が荒れ、海水が龍の形になり古城たちに降りかかった  
それ自体には攻撃力はない。しかし

「塩化ナトリウムその他不純物の混ざった水は電気をよく通します  
わ。まあ、第四真祖は殺せなくてもあなたくらいなら…ね？」

夜架は笑っている  
さながら悪魔のように

「先輩！一度逃げましょう！」  
「ど、どこに？」

「クスキエリゼの潜水艦です！」

言うが否や、雪菜は古城を掴んで海に飛び込んだ  
レビュイアタンの背中に残された夜架は、頭の方を見やりつつ、また  
クスリと微笑んだ

「期待していますわ、草薙さん」

## 第9話

草薙が呼んだ夜斗は、すぐそこにスピリダスを浮かべて小型ボートでレビューアタンのすぐそばに来て いた

「でかいな…相変わらず」

夜斗は草薙がいる頭頂部まで、最大全速で向かつた  
それでも1分ほどかかったことから、大きさが生物にしては果てしないものだとわかる

「草薙、待たせたな」

「きたねえ。主は知ってるはずだけど、こいつがレビューアタン。んで、これが俺の主」

「冬風夜斗だ。粗方電話で聞いたが、本人をビンタしたいと？」

『うむ。可能なら』

「ふむ…。よからう。ただしその姿には二度と戻れなくなるが、それでもいいか？」

『構わない。この巨大な体にも、うんざりしていたところだ』

「了解。ID085685の管理権限を取得…完了。オブジェクトサイズ、0FA0より00A8に変更。リディフィニションオブジェクト、ヒューマンクラス。コンプリート」

夜斗の声に応じるようにレビューアタンの体が少しずつ浮き上がり、まず大きさが1メートルほどに変わった

その後、容姿が蛇や龍に似たものから人間の姿へと変更される

「今のつて…」

「オブジェクトコントロール。恩恵《アドミニストレーター》《管理者》の最も基本的な使い方だ。とはいって、《コンフィギュレーター》設定者より段階を踏まなきやならんから、効率は悪い」

「これが、私の姿…なのか…?」

「そうだ。俺の異能により、肉体のサイズと形状を変えた。《設定者》がやる場合、脳内イメージに基づいて形狀を変えるとサイズが自動で変わること、俺がやるとサイズが固定されるからな。先にサイズを変えた」

「ふむ。まあ、あれだけ強大な肉体で人間になれば目立つな」

「そういうことだ。：名前は草薙がつける。あと――」

夜斗が目を向けたのは夜架だ

目の前にいる古城と雪菜が潜水艦の上から対峙している

「あれをとめろ、草薙。多分眷獸が目覚めて、新しいものを召喚しようとしている。そしてラーニングが正しければ…」

「…！<sup>キフア・アーテル</sup>夜魔の大剣か!?」

「レビュイアタンがぱつと見いなくなつたにも関わらず喧嘩してくるからな、召喚するだろう。止める」

「…了解」

「私も連れていけ。役に立つことだろう」

レビュイアタン…だつた者が言う。草薙は夜斗になげられたものを受け取り眺めた

「この船の鍵だ。貸してやる。壊したら給料天引きだからよろしく。あとは任せた」

夜斗はスピリダスを退避させるために、夜架同様に空間跳躍で戻り、発進させた

草薙は借りた鍵を挿し直してエンジンをかけ、レビュイアタンに座るよう言う

「座るとは…同じような姿勢を取ればよいのだな？」

「ああ。つかお前女の見た目してるんだからそれなりの言葉を…つて知らないのか。じゃあなんでもいいや」

座つたレビアタンを確認して、草薙が船を発進させる

「お前の名前、レビアタンだと呼びにくいし莉緒リオって呼ぶけどいいか？」

「構わんよ。好きに呼ぶといい」

船は夜架と古城たちに接近していく  
膨大な魔力が放出されたところで、草薙は恩恵を使つた

## 第10話

「《災厄者》 災厄顯現、高波・大！」

古城と雪菜が乗る潜水艦がバランスを崩し、魔力の放出が止まつた波が収まるのとほぼ同タイミング、草薙は彼らの元へと辿り着いた

「やめろ暁古城。レヴィアタンは消えたんだ、眷獸を使うんじゃない」「お前は…さつきの…」

「靈桜草薙。そこにいる黒淵夜架と同じく、第零機関の一員だ。うちのもんが済まなかつた、ここは鉢を收めてくれないか?」

「あら、草薙さん。第四真祖がレヴィアタンに傷を負わせないようにしたというのに、散々な言い様ですわね?」

「程があんた。どうせ煽つたりしたんだろ?だからそいつらは潜水艦の中という誰にも見られない密室で吸血行為して対抗手段をつけたんだから」

草薙はため息をつきながら、船を潜水艦に横付けした  
古城と雪菜に乗るように伝えて、夜架を見る

「これで解決ですわね。その子がレヴィアタンでしょう?」「えつ!?

古城と雪菜が驚愕した顔つきでレヴィアタンあらため莉緒を見る  
「ふむ。今世の第四真祖か、貴様。そこの小娘はわからぬが。私はレヴィアタン。まあ莉緒と名乗ることになるが」

莉緒の姿は、夜斗が変更したものだ  
手足は細く長い。髪は紫に近い黒、目は黒と赤。大凡人間ではな

い、ということはわかるものになつてゐる

「第四真祖、その子は預ける」

草薙は船を運転しながらそう告げた  
そして古城は数秒遅れて声を上げる

「無理に決まつてんだろ!?妹いるんだぞ!」

「どーにかしてくれ。うちの機関の者じやなきや俺の家は使えない。  
一応社宅扱いだからな」

「それは…そななんだろうけど…」

「けど、それは機関の総司令さんに聞けばいいのではないんですか?」  
「聞いたところではなあ…。莉緒がうちの機関に来るなら別だけど、そ  
の場合主が死ねといえば死ねるほどの覚悟が要るし」

というのは草薙の嘘だ。ただめんどくさいというだけである

「じゃ、じゃあ獅子王機関で保護してもらうとか…」

「師家様が容認してくださらないと思います。何分機密事項の多い組  
織ですから…」

「あら、まだ島に到着していなかつたんですね?」

草薙の横の水面を滑るように移動しながら夜架が声をかけた  
今も空間跳躍で来たのだろう。古城と雪菜にはその能力というの  
がどういったものなのかわからぬ

「ああ。で、なんの用だ?」

「辞令ですわ。第二部隊隊長靈桜草薙を、絃神島駐在とする。並びに  
レビューアタンの保護を命ずる、とのことです」

「…まじで?」

「ええ。残念ながら」

それだけ言い残して、夜架はクスクスと笑いながら消えた

「はあ…勘弁してくれよ…」

## 第11話

翌日。日曜日のため、草薙は古城の家を訪れていた

「こんにわー。隣に越してきた靈桜草薙でーす」

「莉緒だ」

「…お前らもか。まさかとは思つてたけど隣にきたのか…」

「そういうわけだ。ちとお邪魔するぞ」

草薙は莉緒を連れて暁家に踏み込んだ  
妹の凪沙は姿が見えない。部活らしい

「古城、頼みがある」

「すでに呼び捨てされてる…。なんだよ?」

「莉緒の服を買つてやりたいんだけど、センスが俺も莉緒もなくてな  
…。なんかセンスよさげな女子知らない?」

「…あー、浅葱ならセンスいいと思う」

「藍羽浅葱：電子の女帝か。じゃあ呼んでくれ。あとお前もこい」

「えー…。今日はゆつくり休むつもりだつたのに…」

「じゃあ別の人には頼むか。いやあ、焼肉屋連れてこうと思つてたんだ  
けど無理強いはできないもんなー」

「今すぐ行こう俺たちの仲じやないか」

「現金なやつ、というのはこのようなことを言うのだな」

「そうだ、こういうやつにはなるなよ、莉緒」

「貴様は私の父親か」

焼肉につられた古城が浅葱に電話をかける

ちなみに今莉緒が着ているのは夜架が持つてきたものなのだが、下  
着はなく、さらに草薙のパーカーのみだつたため、風が吹けば事件が  
起きる

構造上は人間と何ら変わりないので

「準備できたぞ。すぐ行くのか？」

「おう。獅子王機関に気づかれないようにな」

草薙は空を飛ぶ無数の式神を撃ち落とし、その瞬間に空間転移を使つて移動した

どうやら空隙の魔女の能力は、災厄として認識されたらしい

(けど、やっぱ『災厄者』を経由して魔術使うと魔力消費エグいな。空間制御術式、だつけ。普通に習得したほうが良さそうだ)  
「どうしたんだ?」

「いや、なんでもない。それよりここが藍羽浅葱の家で良かったか?  
お前の記憶から辿つたらここだったんだけど」

「あつてる。つて記憶をたどつた!?!」

「うん。いやそんな驚かれても…」

草薙は古城に電話をかけるように言つて、問題ないという回答が来たのを確認して藍羽浅葱が出てくるのを待つた

「お待たせ、古城。あれ? その人が例の…?」

「第零特務機関第二部隊隊長、靈桜草薙。よろしくくな」

「藍羽浅葱よ。よろしく」

(派手な小娘だな。まあ歳は同じなんだけどさ)

草薙はそんな失礼なことを思いながら、空間制御でデパートの屋上に転移した

「おま、空間制御術式使うなよ」

「いいじやねーか。俺はもう第零機関つて名乗っちゃつてるし」

「何こそこそ話してるので。で、その子が服を用意したいっていう莉緒ちゃん?」

「いえすいえす。この子に似合う服を選んでやつてほしい。金はないから、このカードで払つといてくれ。君の服も買つていいからさ」

第零機関の者たちはそれぞれ、クレジットカードを持たされている法人カードということで、あまり制限がない

「ふーん。私のもいいんだ。いくらまで？」

「別にいくらでも構わないよ。強いて言うなら百万まで」

「人の金でそんな買わないわよ」

「へー??」

古城が訳知り顔でわざとらしく首を傾げていて  
が、浅葱はそれをガン無視して入口に向かって歩き出した  
屋上といつても駐車場だ。出入口はある  
しかし利用されることはない稀である

「莉緒、浅葱嬢についていけ。いいものを選んでもらうとい  
「了解した。第四真祖はこないのか？」

「あー…古城は今から、国家公認ヤンデレストーカーに怒られる重大  
な仕事があるんだ」

「え?」

「ふむ、そうか。わかつた、後ほど連絡しよう」

浅葱と莉緒についていこうと歩き出した古城の背後に、槍を持った  
雪菜が立っていた

「どこに行くんですか？先輩」  
「…勘弁してくれ」

雪菜は笑っていた。しかし、目が笑つていなかつた

## 第12話

「え？ 草薙も俺の監視なのか？」

「言つてなかつたつけ？ 第零機関からの監視役。 いざとなれば第二部隊総動員で古城を狩る」

「動物か俺は」

雪菜の説教が終わり、 服屋の前で待機する三人

草薙は雪菜が興味深そうに眺めるのを見て、 古城と共に服屋に突撃した

適当な店員を捕まえることに成功した草薙

「店員さん、 この子に似合う服と並んでても違和感のないメンズ服を選んでやつてください」

「え…？」

「わかりました、 可愛く着飾っちゃいます！」

草薙は片手を上げて小さく振りながら店の外に出た  
そこにいた莉緒に声をかける

「莉緒」

「来たか、 霊桜草薙。 一先ず選び終わつたところだ」

「人間の服は気に入つたか？」

「まづまづというところだ。 今まで着ていなかつたのだから、 違和感があるのは仕方がない」

肩をすくめながら莉緒は言つた

大量の紙袋を手に、 浅葱が戻ってきてカードを返してくる

「はい、 ありがと。 とりあえず外出用に3セットと、 部屋着を2セット買つといたわ」

「あんがとさん。じゃあそろそろ店に押し込んだ古城と小娘を迎えて行くかな」

「小娘…？」

「あー…なんか古城のストーカー?」

「姫柊ちゃんか…。あの子いつも古城と一緒にいるのよね」

「ヤキモチは程々にしとけよ、女帝さん?」

草薙は驚いた顔をする浅葱を横目に服屋に再度入った  
きせかえ人形にされている雪菜と古城を見つけると同時に、違和感  
を感じた

(なんだ…？体が重い…。催眠呪術か…！)

草薙を含め、その場にいた人間が全て床に倒れた。そして草薙以外  
が寝息を立て始めた

古城と雪菜も例外ではない

(くそ…。あの槍を、起動させるしか…!)

草薙は眼気を抑えつつ、雪菜の元にふらふらとよろけながら歩いて  
いった

ギターケースから槍を取り出し、魔力を流し込んだ

(チツ…やはり魔力じや起動しないか…?)

と思つたとほぼ同時、雪霞狼が黒く染まつた  
そして副刃が展開し、起動する

神格振動波が発され、催眠の呪術がかき消されて草薙は眼気をふつ  
とばすことに成功した。しかし

(まだ目覚めないな。古城も姫柊雪菜も…)

「草薙！」

「莉緒！ 眠らなかつたんだな」

「魔力を放出して抵抗しているところだ。呪術の出力が高すぎて無力化には至らぬが…」

「レビュイアタンの魔力でギリギリか…。術者はなんの目的でこんなことしてんだろう？」

「わからぬ。しかし、敵意があることはまず間違いないだろう。おそらくこれは、第四真祖とそこの監視を無力化するためのものだ」

黒に染まつた雪霞狼が発する神格振動波により、術式自体は壊れたはずだ

それでも目覚めないということは

「…！ 刻印呪術か！」

草薙は心当たりに向けて走り出した

## 第13話

雪霞狼だつたものを装備して、草薙は屋上へと飛び出した  
莉緒が遅れてついてきているのを確認しながらではあるが  
そしてそこにいたものを視認する

「……六番目……！」  
ヘクトス

呼ばれた少女は何も答えない

草薙は躊躇いなく槍をつきさそうとした。が

「……逃げられたか。いや、能力的にあいつじやないはずだけど……」

そんなことをつぶやくのとほぼ同時、草薙はバックステップで回避行動をとつた

振り下ろされたのは銀色の剣。獅子王機関の兵器、六式重装降魔弓デア・フライシユツだ

「……獅子王機関舞姫、煌坂か」

「……流石は第零機関というところね。いまのを避けたのも中々だわ」「基本技能だ。今みたいに遅い太刀筋じや躲してくださいといつて言つてようなもんだし」

草薙はそういうて恩恵を起動した

空には雷雲が立ちこみ始め、海が荒れ出し威嚇する

「これが恩恵……ギフトってやつね。やっぱり危険だわ。ここで排除しないと……」

剣を振るつて草薙を斬ろうとするが、草薙はバックステップのみで回避を続ける

ポケットに手を入れることから、完全にナメているのだ

「やれやれ。莉緒！その槍を俺によこせ！」

「これか？真っ黒だな。ほれ」

草薙は投げられた雪霞狼だつたものを掴み、魔力を流し込んで起動した

草薙の魔力で起動し、靈力と魔力を打ち消す神格振動波を発する

「それは、雪菜の……」

「なんか壊しちまつたっぽいけどな。さて、戦闘再開といこうか？」

草薙がニヤッと笑い、槍を構える

構えは雪菜のものと全く同じだ。それを見て紗矢華が勝ちを確信する

今まで雪菜と戦闘訓練をしたこともある。そのため、同じものを模倣したのであれば対応も考察できると考えたのだ

しかし

「天津、禍津。自立攻勢モード」

召喚された二本の両刃剣が、草薙の周りを飛行し始めた

（テメエが姫柊雪菜の型を知つてるのはわかつてんだ、対策するに決まってんだろう）

「楽しませてくれ」

草薙は雪菜を見て学習した槍の型を真似て接近、攻撃を仕掛ける  
紗矢華は既に戦意喪失といった具合で、防御に徹していた

## 「擬似空間切断か」

草薙は回避すると同時に違和感に気付いた  
そしてその空間切断によつて生じた亀裂を雪霞狼だつたもので無  
力化する

## 「チェックメイト」

紗矢華の首に槍の切つ先を向けて、草薙が宣言した

『災厄者』によつて具現化された戒めレーリングの鎖で拘束し、黒鉄を呼んだ

「言い訳は聞いてやるよ、獅子王機関。戦力として使つて、事態が片付  
いたら殺しに来るなんて卑怯すぎるぜ。まあ意味ないけどさ」

草薙は笑いながら言つた

莉緒が魔力を使い、プレッシャーを与える

「……獅子王機関は関係ないわ。私の独断よ。あなたは危険すぎる。魔  
導犯罪を未然に防止するのも、私たちの仕事だから」

「……どうやら一枚岩ではないらしい。つて一ことでどうしましようか  
黒鉄さんや」

「……その呼び方やめろ」

草薙の影から黒鉄が直立状態で浮かび上がり、地面より上に出たと  
ころで草薙の影が薄くなつた

黒鉄の能力に由来する技だ

「……で殺しておこう。主からは許可をとつてある。デパートまるつ  
と催眠しておるし、言い逃れはできないからな。殺しても文句は言わせ  
んよ」

「ふーん。殺していいんか、じゃあ天撃使うかなあ」

紗矢華が拘束され自由が効かない体で後退りする  
しかし背後にまわった莉緒に行き場を塞がれた

「えーと、使つたことないからデバッグしながらやるか。えー…アーカイブより能力を検索…完了。靈力を龍脈から補充、魔力は自前。次に：水素と酸素の混合気を圧縮…火種を真空で覆つて中に配置。よし準備完了」

草薙の掌の上に、青色の球体が出来上がつていた  
それを紗矢華に向ける

「第零機関を敵に回したのが悪かつたね、獅子王機関。姫柊雪菜も、消すしかないか」

草薙は球体を紗矢華に向けて放つた

## 第14話

「そこまで、ですわ」

草薙が放った球体を手で掴み消したのは、夜架だった怒りに満ちた表情で黒鉄と草薙を見ている

「今、獅子王機関を潰すのは得策とは言えない。というのが、先程出した主様のお達しですわ」

「…そうか。であれば、煌坂紗矢華。貴様の身柄は俺が拘束させてもららう。文句は言わせんぞ、犯罪者は貴様の方だ」

黒鉄の影が浮き上がり、不定形な生物のように蠢く

それに呑まれた紗矢華は、どうなるのか。と莉緒が訊ねた

「大したことはない。モードが3つあつてな」

「一つはさつき俺の影に移動してきたみたいに、影があるところに転移するつてやつ。んで二つ目がありとあらゆるもの喰らい尽くすやつ。最後が喰つたものの時間を止めて保管するつてやつだから、死んだりはしねえ…よな？」

「満点だ。じゃあ俺はスピリダスに帰るぞ」

「ああ、あんがとさん」

黒鉄に軽く手を振つて、草薙は槍を持ち直した

「少なくともこの槍が雪霞狼とやらと同じ機能を使えるのはわかつたし、言靈も同じでええんかな？」

「…？」

「まあ見てろつて。雪霞の神狼、千剣破の響きをもて楯と成し、兎変災禍祓い給え」

草薙の詠唱に応えて、雪霞狼だつたものが結界のように神格振動波を発する

それによりかけられていた呪術の核が破損し、デパート内の人間たちが起き上がる

「…刻印呪術じやなかつたけど、さつき反応があつたのは刻印呪術だつたはず…。てことは、第零機関以外の別の何かがこの世界に来たつてことか…?」

「どうした、草薙」

「なんでもない。とりあえず古城たちのところに戻ろう」

草薙は嫌な予感を振り払うように首を横に振り、莉緒を連れて店内に戻つていった

その直後、スピリダスでは

「…5人目の真祖…?」

「ああ。煌坂紗矢華から聞き出した情報によると、静岡県駿河湾のど真ん中の空間に亀裂が発生して、それが広がつて円になつた。その中から出てきたのがそいつだつたんだとよ。んで、そいつ曰く俺らに用があるつづー話で、その護衛兼監視で煌坂紗矢華がこの島に来たらしい」

「…草薙を襲つた理由については?」

「5人目に対抗できるかを調べると、5人目を俺らが匿つたんじやねえかつつーことで、捕らえて情報吐かせようとしたらしいぜ。まあ結局俺らに捕まつてるんじや話にならねえけどな」

夜斗は顎に手を当てながら思考を巡らせていた

そこにきたのは、夜架だつた

「悪いニュースがありますけれど、置き気になれます?」

「なんでいいニュースがないんだ…。で何?」

「剣巫の武装、七式突撃降魔機槍が草薙さんの魔力で破損しましたわ」

「うつわまじで悪い知らせじゃんか。アイリスを呼べ」

「かしこまりました」

夜架が立ち去つたあと、夜斗はため息をついた

「これ、アイリスが創れればいいけど創れなかつたらまじで事件なん  
だけど…」

「…どうにかなんだろう」

黒鉄は草薙に軽い怒りを覚えながらも、割といつものことであるた  
めに諦めの意味を込めてそう言つた

## 第15話

アイリスと呼ばれた少女が夜斗の前に到着した

「どしたの、夜斗」

「七式突撃降魔機槍を創れるか？」

「よゆーだよ。あんなの、恩恵使えば無限に創れるしね。そもそもアレに頼らなきやいけないっていうのもどうなんだろうね」

「唯一真祖の眷獸を無力化できるらしいぞ」

「そんなの夜斗が召喚権限レベルを剥奪すればいいだけじゃん？」

「そうつちやそうなんだけど、ただの人間が真祖を止める手段だからな」

「唯一を扱う人がただの人間、かな？」

アイリスはいたずらっぽく笑った

「さてな」

夜斗も口の端に笑みを浮かべて答えた

「作つたら草薙のとこに送ればいいの？」

「宅配便で第零機関として姫柊雪菜に送つてやつてくれ」

「りよーかい」

デパートの中に戻つた草薙と莉緒は、雪菜と古城のところに向かつた

「古城。今いいか？」

「なんだよ…」

「先程、獅子王機関の煌坂紗矢華が襲撃してきた」「え…？」

「目的は、突然現れたという第五の真祖の行方を探しているらしい」

「第五真祖、つてことか？」

「一概には言えないんだなあこれが。その時使つてた眷獸が、サダルメリクと同じ見た目をしていたらしい。色は黒だつたっぽいけど

「え？ つまり…どういうことだ？」

「お前…というより、第四真祖の試作品が廃棄する予定だつたものが脱走したか復活したか、みたいな感じかな。つていうところか。ランニングの中に含まれてないからなんとも言えないのがなあ…」

「どうにかなるのか？」

「魔力量がお前の倍だから、お前で負けるレベル」

「マジかよ…相当やばいな」

(といつてもその第五の真祖も俺の一割程度の保有量なんだけどな)

草薙はそう話し、残りは後で話すとした上で雪菜が試着室から出てくるのを待つた

「せ、先輩…。これ、派手すぎませんか…？」

雪菜が着ていたのはワンショルダーと呼ばれるものだ

色はワインレッド。デニムのズボンとカーディガンを着用してい

る

「なんか、こう…姫柊のイメージじゃないな」

「なんだろう…。姫柊雪菜の私服見ないせいで新鮮すぎて…」

「確かに、私を倒しに来たときも学校の制服だつたな」

「3人がかりで言いますか!？」

そんな雪菜を見てまだ時間が掛かりそうだと判断した草薙は、クレジットカードを古城に渡して店を出た

待ちくたびれた様子の浅葱に声をかける

「飯の前に軽くデザートでも食うか」

「いいわね。るる屋のアイスとかどう?」

「美味しいのか?」

「当然。この私が紹介するものに失敗はないのよ」

浅葱はそう言つてウインクした

姫柊雪菜の自宅に雪霞狼が届けられたのは、この日の夕方だつた

## 第16話

古城の家に届けられた荷物を開けるために、なぜか呼ばれた草薙

「なんじやい」

「いや…ヴァトラーからの荷物だから、いざとなつたら草薙に壊して  
もらおうかと…」

「え？ああ、そゆことか。んじやあ開けようぜほい」

草薙が軽いノリで開けた中には、全裸の女が入っていた  
金髪の少女だ。草薙はこの人間を知っている

（邪神の花嫁…！なんでデイミトリエ・ヴァトラーがこいつを持って  
やがる！？）

「いつまで見てるんですか先輩方！」

草薙は突然飛んできた平手を回避することができなかつた  
しかし莉緒に止められたため、腹いせか雪菜の平手が古城に飛んで  
いた

「痛い！」

スピリダスでは

「総員戦闘配置につけ！緊急発進の用意を取り急いで行い、来る襲撃  
に備えろ！」

「「「「はつ！」」」」」

夜斗の指示で動く第零機関の者たちが、慌ただしく艦内を行つたり

来たりしていた

アイリスは機関部に移動し、そこで働く者たちに退避するよう呼びかける

また、黒鉄はまだチャージされていない緊急発進用の魔力の代わりに機関部の端に置かれた機械に乗り込む

「総員準備はいいな！スピリダス、スクランブル！」

夜斗の声に合わせてスピリダスが海面から浮上し、上空へと退避する

『ぐつ…！』

「大丈夫か黒鉄！」

『大丈夫とは断言、できねえな…！けど、奴らがきたなら…そんなこといつてられねえ！』

『それでこそ黒鉄だ。緊急出力に移行するぞ、準備はいいか？』

『いつでも来い！』

「よし。スピリダス、強制高出力モードに移項！・奏音、迎撃ミサイルの装填急げ！」

『もう終わるわ！あと30秒！』

「夜斗様！対象の時空間転移を確認、1分後に作戦エリアに侵入します！」

「想定外の大型飛行戦艦をソナーにて補足！3分後に作戦エリアに侵入速予測！」

「第三ソナーに反応あり！第三の飛行戦艦接近中！近距離砲にエネルギー充填してくる模様！」

「なんだと!?近距離砲なんて、スピリダスでさえ積んでないぞ！」

夜斗は叫びながら、奏音の返答を待った  
異様に長く、そして短い時だ

『装填完了よ。《執行者》、照準！』

『こちら黒鉄！魔力拘束具を破壊したから、いくらでもいけるぜ！』

『アイリスだよ。《創作者》で創った仮設近距離砲準備オツケー！いつでも撃てるよ！』

夜斗たちが今戦闘態勢になつたのには理由がある

現在、別の世界からこの島を狙っている者が襲撃してきているからだ

とはいえ転移の予兆から10分ほどの猶予があるため、この緊急発進が使える

「転移確認しました！対象は…そんな…！」

「どうした！」

「て、敵艦に搭乗しているのは第四真祖の第2世代！槍型の眷獸が動力になつています！」

「予定より転移が早いじゃねえかよ…暁零菜…！」

夜斗は悪態をつきながら、小型戦闘機の発艦準備をするように伝えた

「危険すぎます！」

「やるしかない。俺のために共倒れするのはもつたいないからな。それ…」

夜斗はモニターに映る絃神島に目を向ける

「いざとなりや、草薙がいる」

## 第17話

草薙は見て いた

スピリダスが予告もなく飛ぶ瞬間を

(スクランブルか…?俺に連絡できないほど急に?つてなると襲撃か)

草薙は立ち上がり、雪霞狼だったものを掴む

雪菜に届いた雪霞狼は、アイリスが作ったもの。であれば本家より性能はいいはずだと考え、草薙はこの場を雪菜と古城に任せることにした

「すまんが少し出る。スピリダスがスクランブルした。姫柊雪菜のところに連絡は?」

「特に何もありません。第零機関の問題なのでは?」

「そういうことだな。…うん?あれは…飛行戦艦!?現代の技術じやまだ作れないはず…つてことは、まさか…!」

草薙は窓から飛び出し、携帯電話で主たる夜斗を呼び出す  
しかし、応答はない

「もう来やがったのか、暁の帝国…!」

夜斗は過去に、『暁の帝国』を名乗る組織が、現代の絃神島を襲撃してくることを予測していた

その日取りまではわからなかつたものの、かねてから訓練を重ねてきたのだ

スピリダスとの砲撃戦が始まった

スピリダスの武装は空対空広範囲破碎弾頭と、大陸間弾道ミサイルの二つのみ

あのままでは確実に撃墜されてしまう

「くつ…！眷獸も射程外だな…、仕方がない。シフトアップ、フォースギア」

草薙の中にある魔力のギアが一つ、上がった  
これは魔力の放出量や圧力に関わるもので、ギアを上げれば上げるほど放出量が増える

しかし圧力が低下するため、ギアが一つ上がるごとに単発の威力が半分になる

2つ上がれば更に半分、3つ上がればもう半分…と徐々に減少していく

最大のオーバーギアにすると、元の4%以下になるが、射程は約30倍

であれば通常時の1段階上、フォースギアまでも眷獸——というより『災厄者』<sup>ディザスター</sup>が届く

「！あれは…F35か！…ことは乗つてるのは主…！」

草薙は驚くと同時にギアを戻した

そして走り出し、空間転移を思い出して転移する

「あの光は…汎用恩恵の『攻撃機』…。あれじゃ間に合わねえ…！」

こういうときに限って、夜斗に次ぐ実力を持つ夜架が非番である  
草薙は舌打ちをしながら、雷雲を発生させて戦艦に高圧雷を落とした  
しかし

（あれで落ちねえのか…！）

全く効果があるよう見えない

「疾く在れ、【夜摩の黒剣】！」

ギアをトップ…つまりは5に上げて、眷獸を放つ  
これにより、古城が使うときの半分程度になつたはずではあるが

「は!? 雷で撃ち落とした!?

『草薙か』

「主！どうなつてやがる!?

【夜摩の黒剣】が撃ち落とされた以上、トップギアでは眷獸を使う意味  
がない

そのため、急に通信してきた夜斗に問うしかなかつた

『第四真祖の第二世代だ。トップギアにしたら叩き潰せない。ファーストに入れろ』

「けどそれだと、古城が使うときの10倍近くなるぞ!?

『問題ない。紗奈の《拒絶者》リヴァイダで絃神島は守つてるし、スピリダスは緊急退避させる。俺もお前がファーストギアで眷獸を使うなら、さつさと逃げるさ』

「…了解。責任はとつてくれよ?」

草薙はギアをファーストに入れた

単純計算では、サードで放つときの4倍だ

しかし、古城と同じ威力にするためにはフォースギアにする必要がある

つまり、ファーストギアで放つた場合は8倍の威力  
普通に使えば島どころか本州まで影響が出てしまう

「…ギア、ファースト。疾く在れ、【夜摩の黒剣】！」

第四真祖のものであるはずの巨大な剣型眷獸の色が、一段と黒く見  
える

## 第18話

【夜摩の黒剣】が飛行戦艦に向けて落下する

当てる前に止めるなどという甘えたことはせず、草薙は躊躇いなく本体にぶつけた

真つ二つに割れる戦艦から飛び出してきたのは、雪菜によく似た少女だった

「お前は…。暁零菜か」

「なんで知ってるんですか？」

「ラーニング済みだ。つかその眷獸、本当に雪霞狼に似てるんだな」

草薙は雪霞狼だったものを構える

ただし構えは夜架に教わった、夜架オリジナルのものだ

「その槍…ママの…それにさつきの眷獸はお父さんの奴ですよね?なんで貴方が使えるんですか?」

「さあね。戦えばわかるんじゃねえの?」

草薙は、破碎された戦艦の欠片が飛来し、その衝撃で墜落した3機目の戦艦が落水したのと同じタイミングで走り出した

(眷獸なら…雪霞狼が効くだろ!)

〔槍の黄金〕!

「おらあ!」

零菜の眷獸と競り合う草薙の槍は、何かを求めるように草薙の魔力を拒絶した

今、雪霞狼だつたものから放出される神格振動波は必要最低限。眷獸を打ち消すことはできていらない

「…まだ従わないか」

「…まさか無理矢理支配して…!?」

「…『炎厄者』を知つてゐるのか。まあ未来人なら当然かね」

ふと草薙は思った

この槍の呼び方は、現状【雪霞狼だつたもの】もしや、名前を欲しがつてゐるのでは?と

「…氷月華」  
ひょうげつか

草薙が呟くと、雪霞狼だつたものが黒く輝いた

一瞬のことだ。しかしそれが、草薙に確信をもたらすことになった

「…そうかい、お前も名前が欲しかつたんだな。いくぞ、氷月華」

草薙は槍に魔力を流し込んだ

応じるように、完全な神格振動波が発せられたのを、草薙は感覚で認識した

「なつ…！」

「終わりだ、暁零菜。失せろ」

槍型眷獸を氷月華にて破壊した上で、そのまま心臓を貫こうと力を込める草薙

それに対抗してか、もう一度槍の黄金を召喚し、草薙の頭蓋を貫こうとする零菜

しかしそれを阻むものがいた  
夜斗と、誰か草薙の知らない人だ

「…そこまでだ、草薙」

「これきりにしようか、零菜」

「主…!」「凱亞…」

「すまないね、夜斗。少々管理不十分だつたらしい」  
「構わん。俺らもお前の飛行戦艦ぶつたぎつたし」

状況が掴めない草薙と零菜は互いに顔を見合させ、それぞれ攻撃をやめた

「…暁凱亞。これは貸しにしてやるから、生まれたら返せ」

「無茶にもほどがあるよ…。また過去渡りをして俺自身に伝えなきやいけないじゃないか」

「待つてくれ主、どういうことだ?」

「ん?ああ、こいつらは敵じやなかつたつてこと。暁零菜…つまり古城の未来の娘がきたのは、俺たちの存在を危険視したから。けどそこの凱亞…つまり息子は俺たちと交渉しに来た。それは絃神島を破壊しないようにするつてこと」

「沈められてしまうと俺も萌葱も零菜も生まれなくなつてしまふからね、可能な限り守つてもらおうと思つたのだよ。それはそうと…この人が草薙さんかい?随分と若い雰囲気だね」

「未来人なら知つてるんだよな、そこも。俺は草薙だよ」

零菜は思考を放棄した

## 第19話

「つまり、主は襲撃を予知したけど、それは零菜つてやつの先走りだつたつてわけか」

黒鉄と草薙、そして夜斗が一堂に集まり、先程の事象についての話をすすめる

「そういうこと。凱亞曰く、不確定な未来がいくつかあつて、絃神島が崩壊した時点で雪菜が死ぬから、零菜が生まれないし、同じ理由で紗矢華がいなくなると凱亞が、浅葱がいなくなると萌葱が生まれなくなつちまうつてさ」

夜斗はそう話しながら、外部カメラの映像をかけていた伊達メガネに投影した

古城が謎の物体に吹っ飛んでいくのが見える。が、それが何かは興味がない3人であった

「あれ、放置すんのか」

「古城だしどうにかなんだろ。一応俺が『災厄者』で雪霞狼を強化したし、眷獸ならあれくらい壊せるさ」

「…どうにも嫌な予感がするぜ。なあ、主？」

「…今回目覚めるのはメサルティムだつたか。どうにかなるんじやね？一応防御系の眷獸だし」

夜斗はそう言いながらも、スピリダスの空対空ミサイルを発射してみた

しかし当たる前に碎け散つたのが見える

「スピリダスの攻撃が阻まれるんじやあな…」「喰つてみるか？」

「古城も雪菜も死ぬだろそれ」

「草薙、駐在員なんだからどうにかしろよ」

夜斗に言われて、頭を搔きながらため息をつく草薙

「卵が孵化して雪菜たちが攻撃すりや消えるだろうよ。ただ、ザザラマギウとかいう邪神が上手いこと消えるとは思えないし、多分破片が落ちてくる。【災厄者位階】と【汎用人工恩恵】もしくは人工恩恵で止められるかどうか…」

草薙がそう言いながら黒鉄を見た

その気になれば黒鉄だけで邪神の破片は何とかなる  
しかし飛び散る範囲がわからない以上、複数名で行く必要があるのだ

「雪音を連れていけ」

夜斗の言葉に満足したのか、草薙はニヤツとした

「ぱどらきっさー！」  
「なんですかいきなり…」

草薙の奇つ怪な行動に眉をひそめたのは、先程夜斗に呼ばれた雪音  
という少女

彼女こそ第零機関が所有する人工生命体ノイズシリーズのプロ  
タイプである

所有する恩恵は人工恩恵の一つ、《破壊者》だ

扱いくさや性質から、この日まで日を見ることは少なかつたのだ

が：

「叫びたかつたんだよ。なあ黒鉄」

「俺を巻き込むな。で、作戦は？」

「雪菜たちがさつき出てきた邪神の花嫁と融合したアンジェリカの体に埋め込まれたチップ型魔術回路を破壊すると同時に突撃して、俺は眷獸で対応、黒鉄は『暴喰者』<sup>グラトニー</sup>で喰えるだけ喰つて、雪音は何とか壊してくれ」

「作戦杜撰すぎません？ もうちよつと考えてくださいよ」

「無茶言うな。あと5分もないんだぞ、魔術回路壊されるまで」

というのは、夜架が告げた予言の話である

夜架は非番であるにも関わらず草薙に連絡を入れてきた。そしてそこで、魔術回路を破壊すればザザラマギウは自壊するものの、邪神だつたものの欠片が地上に落下すると予測したのだ

3人しか集まらなかつた以上、綿密な連携は意味をなさない  
一人一人がバケモノだからだ

「よし、時間近いな。まずあのザザラマギウの真下に移動する。そしたらあとは自由に防ぐ感じで」

「フワツとしてますね。まあいいですけど。足を引っ張らないでくだ

さいね、草薙さん

「はつはつは。言われてるぞ草薙」

「うつさいわい…。んじやいくか」

3人は開いたハッチから下を見た

スピリダスが発進してザザラマギウの真上に位置しているため、こからまつすぐ飛び降りれば問題はない

「作戦開始！」

草薙の号令に合わせるように、3人はハツチから飛び降りた

## 第20話

「じゃあ俺真下やる。草薙は北側、雪音は南側な」

勝手にそう言つて黒鉄は空中に恩恵で足場を作り、それを蹴つて落下速度を加速させた

「行くぜ、『暴喰者』！」

黒鉄から溢れ出す濃密な闇が何匹かの生物をかたどる

それは空を飛ぶような見た目をしていないものの、地上に降り立つと同時に徘徊を始めた

黒鉄は黒鉄でビルの屋上に着地し、恩恵を準備する

「全く勝手だよな、あいつ。じゃあ雪音、頼んだ」

「はい。久しぶりに恩恵をフルで使えますね」

雪音は取り出した大剣を構えた

それは夜斗が持つものとほぼ同じ大きさで、雪音の細い腕では持つことさえ厳しいよう見える

しかしそれを、雪音は片手で持ちながら南を見た  
ちょうど雪菜が魔術回路を破壊し、落下し始めた欠片が宙を舞つて  
いる

「『破壊者』ブースト・セプタ！」

雪音の靈力が異常なレベルに増強される

そしてその靈力を乗せて、剣を振り抜く

と、靈力が斬撃のあとをなぞるように飛来し、広範囲に拡散した欠片を破壊していく

振り抜いた剣に靈力を乗せて斬撃を飛ばす。これ自体は雪菜にも

教えればできることだ

しかしそれを、半径数百メートルの範囲で1キロほど飛ばすことは夜斗をもつても難しい

「最初つからとばすなあ…。天津！禍津！」

草薙が召喚した双剣が合体し、さらに元雪霞狼である氷月歌と融合した

巨大な槍となつたそれを、草薙は全力で投げる

「《災厄者》災厄顯現。神槍スピア・ザ・グングニル！」

真つ直ぐに巨大な欠片を破壊したあと、速度を落とさずに縦横無尽に空を飛ぶその槍が、周囲の欠片を破壊していく  
順調にも見えたが、一つ巨大な欠片が、3人の守る場所を離れて長距離へと飛ばされていくのが見える

「間に合わねえ…！黒鉄！雪音！」

「無理だ！もうアラガミを召喚できねえし、俺が喰うには遠すぎる！」

「私の斬撃の飛距離では届きません！」

「眷獸も間に合わねえぞ…！」

草薙がそれでも足搔こうとビルの屋上を踏みしめようとしたとき、欠片が消失した

欠片の向こう側に見えるその人影は…：

「夜架…」

非番であるはずの夜架が腕を振るつた。それだけで消えた

第零機関のいう非番というのは、原則的には本州の本拠点にいると  
いう意味だ

それなのに、ここまで来て欠片の破壊を実行した

「無茶しやがつて…」

草薙が咳くと同時に、夜架が落下を始めた  
もう満身創痍だったのだろう。落下に抗うための恩恵すら起動していな

しかしその夜架の姿が消えた

「私を置いていくとは水臭いではないか、草薙」

「莉緒…！ 正直助かつた」

「すびりだす？」に置いていかれたときには500回ほど殴ろうとも思つたが、その言葉が聞けただけいい。許そう」

草薙の背後に夜架を抱えた莉緒がいた

## 第21話

翌日。彩海学園高等部古城のクラス

「えー…靈桜草薙です。まだよつと絃神島に慣れて無いところありますけど、そのへん含めて仲良うしてください」

尚、莉緒は中等部三年生…つまり雪菜と同じ学年クラスとして編入した

それは夜斗が手配した戸籍で入っているため、名字を名乗らざるを得ない

草薙には元々名字があるため大した苦労ではないのだが

「では曉、この小僧の世話を任せたぞ」

「ええ…これ以上負担をかけるのはやめてくれよ那月ちゃん…いたあ！」

「教師をちゃんと付けで呼ぶな！何度言つたらわかる！」

飛来した本が直線で古城に衝突し、古城は悶絶している

(騒がしい奴らだな…。つかこの教師どこかで…見たことあるような…?)

草薙は昼休みの時間にスピリダスに問い合わせた

といつてもメインシステム内蔵A-Iの「アイ」に連絡をしただけだが

が

(零の元同級生…?こんなチビが…?)

草薙は送られてきたデータを読みながら経口保水液を飲み干した

草薙は暑さに弱く、適度に水を飲んでいても脱水症状を引き起こす

そのため、適時経口保水液の摂取が必要なのだ

「アイ、少し聞きたい」

『はい?』

やけに人間的なイントネーションでアイが答えた  
不機嫌そうなその声の裏側に、頼られたいという基本設計が見え隠  
れしている

「零と那月の関係について詳しく」

『簡単なことです。零さんはこの時空にて、南宮那月をオトした唯一  
の存在であり、あの人を悲しませることができた唯一の存在であります』

「零彼女いたんか」

『この時空で十年前ですけどね。私たちがいた時空では百年前といつ  
たところでしょうか』

零というのは、草薙が年端もいかない幼子だつた頃から第零機関…  
当時は図書館という組織だつた…に所属していた

そこから既に50年は経過している

零は草薙や黒鉄にとつては父のような存在だつたのだ

(あの父親みたいな貫禄は、この世界で身につけたのか)

『補足しますと、零さんは元々第零真祖と呼ばれる5番目の真祖でした。しかしそれを嫌つたエネミーがこの世界から強制的に私たちの第十三時空に送り込んだんですよ。その時、夜斗様が零さんを拾つてますが、その直前に捨て子だつた貴方と黒鉄様が保護されたんです』

「第零真祖…。最近出現した、5番目とは関係ないのか?」

『あれはあくまでも別時空の者ですよ。確か、第一時空の真祖。夜桜  
一樹、だつたかな』

アイはわざとらしく首を傾げた

彼女が知り得ない情報はただの一つもない

それを草薙や夜斗たちに教えるかどうかは彼女の期限次第ではあるのだが

「じゃあその一樹、つてのを撃墜すればいいのか？」

『そうなりますね。こちら側につかなければ第一時空に送り返して、つくようでしたら非常勤として雇うのが得策かと』

「どつちにしてもめんどくさいな」

鐘がなり響く

草薙は既に授業開始の5分前であることに気づき、教室へと戻った

## 第22話

死神は、魔族が当たり前になつてゐる絃神島でも目撃されたことはない

それはひとえに、死神が魔族ではないからだ

死神が何を指すのか、ということさえ現代ではわからない

「つつかれた…」

夜斗は机に突つ伏しながら言つた  
氣だるげに顔を上げ、またすぐに突つ伏す

「…仮にも指揮官がそれでいいのかよ、主」

「黒鉄があ…。ノックしろつて言つたはずだろお…」

「言われてた気がしてきたな。草薙からの定時報告だが、聞くか？」

「おー、頼むぜー」

「デイミトリエ・ヴァトラーから送られてきた荷物の中に入つていた女が邪神の花嫁だつたんだよ。同タイミングで俺らが襲撃されて、そつちの対応に当たつたから現地の様子は不明。対応終了後に邪神が復活していく、またそつちの対応に向かつた。聴取によると、邪神の祭壇がアメリカだかの軍人の中にあつて、そいつに邪神の力が宿つた」

「アンジェリカ・ハミーダだつけ？あの女。そいつは死んだのか？」  
「殺したつてよ。邪神の力が宿つた経緯としては、軍人が荷物女を取り込んだんだと。だからまあ、制御が効いていた」

黒鉄は報告書として送られてきた紙を読み上げ、夜斗を見た  
政府との話し合いを終えたばかりの夜斗は、若干老けて見える

「制御用回路を七式突撃降魔機槍で破壊したところ、邪神は崩壊・分裂し落下。その後は知つての通り、俺と草薙と雪音で対応した」

「ほーん。まあ結論から言うと島に被害はない、と?」

「ないな。強いて言うなら俺の能力が無駄に進化したし、今すぐにも島を破壊することができるようになつた」

「良好良好。牽制しやすくなつたな」

夜斗は満足げに椅子に座り直し、肘掛けに肘をついて足を組んだ  
そして黒鉄の背後に立つ莉緒にようやく気がついた

「…レビュイアタンじやねえかなんでここに…」

「主に用があるんだとよ」

「うむ。草薙と共に過ごし、守り守られるために汝を主と認め、草薙を

娶る許可をもらいに来た」

「性別逆じやないかな普通。まあいいや、草薙を好いてると?」

「…わからぬ。二人でいるときは気分が良くなるが、雌がいると腹正  
しく思う。故にこれを恋愛感情と感じた」

「ほーん…。あのバカでかい魔獣にも感情がね…」

「…主」

「ああ、わかってる。莉緒、草薙を夫とするには条件がある。とりあえ  
ず一つだけ伝えておくが、家事くらいできるようになれ」

夜斗は指を鳴らした

現れた夜架が、莉緒を見てクスッと笑つた

「莉緒さん。わたくしが、貴女に家事を教えますわ。スバルタで  
「ぬ…。お手柔らかに頼む、だぞ」

楽しげな夜架と、それを警戒する莉緒  
二人を見て夜斗は、久々に温かみを感じたのだつた